

歌唱教材による知的障害児のリズム反応

齋藤一雄

目的

養護学校用音楽科教科書に掲載されている歌唱教材のなかには、擬音や単純なリズムパターンを含む曲があり、また、児童がよく知っている曲も多く、小学校特殊学級の知的障害児にとって、そのような歌唱教材を用いることによって、手拍子等によるリズム反応を引き出しやすいか。

この実践研究の目的は、養護学校用音楽科教科書に掲載されている歌唱教材を使用し、小学校特殊学級の知的障害児7名を対象に、手拍子等によるリズム反応を課題とした活動を授業の中で設定し、実際にリズム反応を引き出すことができたかを明らかにすることである。

結果

その結果、四分音符と休符で構成されたリズムパターンへの反応はよいが、八分音符がつながったパターン、長さの異なる音の組み合わせによるパターンで同期した割合が小さくなった。また、同じ長さの音にくり返し反応していると、途中で乱れてくるケースもみられた。誤パターンでは、八分音符を省略して反応するケース、逆に、細かくたくさん反応してしまうケース、そして、一音遅れて反応したり、一音早く反応してしまうケースも見られた。

しかし、すでに知っている曲では、また、初めての曲でもくり返し行うことによって、部分的に歌ったり、体を揺すったり、楽しそうにリズム反応することができ、詩とメロディとリズムが一体化した歌唱教材の有効性について観察することができた。

方法

授業は、2004年2月～3月に4回行った。場所は、2教室ぐらいの広さをもつ多目的室である。筆者が全体をリードし、音楽担当教師、特殊学級担任等、計5名で指導にあたった。対象児7名は、1年生2名、2年生2名、3年生1名、5年生2名である。自閉的な傾向のある児童1名、歩行がやや不安定な児童1名も含まれ、慣れていない人や活動に対して消極的であったり、自信をもって活動できなかつたりするが、他人との簡単な意思疎通もとれ、慣れてくると明るく活発な反応がみられるようになる子どもたちである。

内容

1. 知的障害児のリズム反応に関する研究

養護学校用音楽科教科書には、小学部用『おんがく☆』『おんがく☆☆』『おんがく☆☆☆』中学部用『音楽☆☆☆☆』と4種あり、解説書も作らせている(文部科学省、2002)¹⁾。この教科書に掲載されている教材は、それぞれ約60曲前後あり、『おんがく☆』から『音楽☆☆☆☆』へと発展的に構成されている²⁾。そして、そのうちの約75%が歌唱教材である。

一方、健常幼児も知的障害児も、3歳児になると等間隔の音に同期でき、5歳児で確実に、6歳児ではいくつかのリズムパターンに同期できるようになるという³⁾。

齋藤(1995)は、養護学校小学部の児童を対象に、歌唱教材「とんでったバナナ」のなかで、・休休休と・・・休のリズムパターンに手拍子によって同期する課題を与え、単純にくり返し提示されたリズムパターンに同期するよりも、歌唱教材の中でリズムパターンを提示して同期するほうが同期しやすいことを報告した⁴⁾。

2. 授業の構成

7名の児童が、楽しみながら参加し、積極的な音楽リズムに対する反応と身体表現をうながすことができるように、また、養護学校用音楽科教科書にある歌唱教材を用いて、授業を構成した。

使用した教材は、季節や行事、生活との関連があり、身近に聞きなじんでいる教材を中心に、「バードダンス」(フォークダンス)、「手と手と手と」(手拍子による拍打ちとリズム打ち)、「にぎってひらいて」(手を握って開いて手拍子)、「ことりのうた」(指先手拍子によるリズム打ち)、「足ぶみたんたん」(リズムに合わせた足ぶみ)、即興によるリズム運動(歩・走・パターン歩行など)、「ゆきやまへいこう」(テーマをもったリズム運動)、そして、「かめのえんそく」(鑑賞と歌唱)である。

展開は、児童の興味・関心を大切に、少しずつ積み重ねていくようにし、筆者が児童の前で師範しながら行った。これらの歌唱教材の擬音の部分やリズムパターンに手拍子や足踏みで反応した様子をVTRで記録し、同期した割合や誤った反応のパターンについて分析した。

3. 手拍子「手と手と手と」(おんがく☆☆☆)

「手と手と手と」(二本松はじめ作詞・作曲)は、4/4拍子20小節の曲で、思わず手拍子したくなるような曲である。前半の8小節は手拍子による拍打ちを行い、中間は八分音符2つだけの手拍子、後半は終わりまで拍打ちを行った。

前半と後半の拍打ちの結果を見ると、Mを除いてほぼ同様な割合で同期できていた。Mは、積極的に反応しているが、前半の部分では課題に集中できずに取り組まないことや1拍打って1拍休みのパターンになることもあった。しかし、教師が近づいたり、肩に手を触れたりすると同期反応が回復した。後半の部分は、課題にそって手拍子ができていた。

4. 手拍子「にぎってひらいて」(おんがく☆☆)

「にぎってひらいて」(安田浩作詞・作曲)は、2/4拍子14小節の曲で、歌詞に合わせて手を握って開き、「タンタンタン」などのリズムパターンに合わせて手拍子することができ、そして、やさしさに富んだ曲である。しかし、児童にとっては初めて経験する曲であった。

全体を見ると、「タンタンタン」のリズムパターンに対する同期の割合が高く、「タタタタタン」のリズムパターンに対する同期の割合は低く、「タータンタンタン」のリズムパターンに対しては2人が100%でき、1人が50%でき、1人が25%でき、他は同期できなかった。

5. 手拍子「こどりのうた」(おんがく☆☆)

「こどりのうた」(与田準一作詞・芥川也寸志作曲)は、4/4拍子、歌の部分が7小節であるが、かわいらしくまとまった曲である。八分音符や付点の入ったリズムからなり、ピピピピチチチチピチクリピなどの鳴き声を模した歌詞を含んでいる。そして、児童にとってはよく知っていて、歌うことができる曲であった。八分音符の部分は、手のひらに細かく指先打ちして合わせる活動とした。

まず、ピピピピピ休とチチチチチ休の同じパターンについて比較すると、全員、後半のチチチチチ休に同期できた割合が高くなっていた。しかも、TNSは100%に達した。また、Kは初め、四分音で反応することが多かったが、2日目に八分音での反応を試み、3日目の後半でリズムパターンに正確に反応できるようになっている。Yは、数多く八分音で反応

しながら、正確ではないがリズムパターンに反応するようになり、Mは、細かく打ち続けることが多く、止まらなくなることもあったが、3日目からはリズムパターンに合わせて止めることができるようになった。

ピチクリピ休は、四分音で反応するようにしたが、Sは八分音で反応することがあり、同期できた割合が75%となった。Kは2音目を省略することがあり、Mは細かく打ち続けることが見られた。TYNRの4人は、ほぼ100%できた。

6. 足踏み「足ぶみたんたん」(おんがく☆☆)

「足ぶみたんたん」(則武昭彦作詞・作曲)は簡潔な曲で、「足ぶみ足ぶみタンタンタン休、足ぶみ足ぶみタンタンタン休」という歌詞で、2/4拍子8小節の長さ、曲全体の構成もわかりやすいものである。「足ぶみたんたん」のタンタンタン休のリズムパターンに、椅子にすわりながら足踏みして合わせる活動を行った。児童にとっては、初めての曲であった。

手拍子や楽器を打ったりする活動に比べ、椅子にすわって足踏みする動作はより大きく、筋力も必要とする。そこで、足をあげておろすを3回くり返すことになるが、MYは歩行自体は問題はないが、3回目には片方の足をあげることになり、4拍目で止められずにおろしてしまう、つまり、4回足踏みしてしまうことが多く見られた。また、5回足踏みしたり、「足踏み足踏み」の所から足踏み始めてしまうことも、特にMに多く見られた。

引用文献

- 1) 文部科学省(2002)『おんがく☆☆ おんがく☆☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』, 東京書籍
- 2) 齋藤一雄(2003)「養護学校小学部用音楽科教科書の分析」『学校音楽教育研究』, pp. 189-193
- 3) 古市久子(1971)「Rhythm反応における発達の研究の検討と実験」『音楽学』17, pp. 94-106
- 4) 齋藤一雄(1995)「精神遅滞児のリズムパターンへの同期とテンポ」『埼玉大学教育実践研究指導センター紀要』8, pp. 1-9